

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2013

2号

松丘保養園の機関誌

松丘保養園のインターネットホームページ
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>

自治会館改修工事終了



昨年11月より改築工事を終えた自治会館は、自動扉、手すり、バリアフリーを備えた理想的な事務所となりました。



新看板も設置



伝統ある看板は正面に



きれいな事務所（会長・副会長）



厚生部、経理部事務所

甲田の裾 平成25年 2号 目次

長い冬を耐えて	松丘保養園園長 川西 健登	2
松丘保養園に赴任して.....	薬剤科長 保田 栄一	4
就任の挨拶	福祉室長 高山 忠久	6
新任の挨拶	会計班長 大木 良夫	8
新任のご挨拶	臨床検査技師長 杉本 隆幸	10
新任のご挨拶	栄養班長 瀧澤 豊	12
新任のご挨拶	看護師長 伊藤 悦子	14
新任の挨拶	看護師長 木浪 真貴子	16
松丘のニューフェイス.....		18
短歌 白樺短歌会		20
文芸コーナー		22
祖母との思い出	三浦 喜美子	24
ぶらり金沢～夜行列車と近江町市場～	耳鼻科 丹藤 淳	30
野の花の微笑み(5).....	比良 信治	33
自治会日誌		40
人事異動①		41
人事異動②		42

表紙写真 「雪まだ残る6月の八甲田」叶 順次
写真提供 福祉室・編集局
※菊池盈 「命あったからこそ」は休載中です。

長い冬を耐えて

園長 川西健登

今年の春は肌寒く保養園の桜も満開にならないまま葉桜になり終わってしまった。六十年保養園にいたがこんなことは初めてだとある方が言われた。その長い冬を耐えて春を待つていたように四月になって間もなくKさんが亡くなった。胆嚢癌が進行する中で、痛いとか苦しいとかは一言もなかったが、病床から雪の窓を見上げて、生れ育ち長く暮した村に帰りたいと言われた。奥さんや娘さんをはじめご家族も遠路何度もお見舞いに来て静かで親密な時間を共にされていたので、私たち職員にもある満たされた感じがあった。

Nさんには脳動脈硬化によって脳の生命中枢である脳幹の循環不全があった。抗血栓療法を強力に施行していたが、ついに脳幹梗塞を発症してからは約一日の生命であった。逝かれる前夜、乱れる呼吸の中でNさんは「長い間頑張ってきたからそれが顔に出ているでしょう」「公園の道を挟んでりんご畑が続いている」とほほ笑んで遠くを見るようなお顔で言われた。十分に生き切ったという矜持が感じられた。あるいは、という気がして奥さんに病室に来ていただいた。病態が重篤であることはわかっていたが翌朝未明に逝かれるとは予測しなかった。奥さんはまだ温もりのあるNさんの手を握んでずっとお名前を本名で呼び続けられた。

Sさんを委託医療のため県病に送りだしたのはその朝のことだった。一週間前に発症した原因不明の間質性肺炎が急速に進行して通常の治療に反応しなかった為である。急なことであったがSさんはそれを了解して下さった。県病で治療が始まり、ご家族によれば翌日に病状はかなり改善したように見えたそうだが、翌々日の夕刻、急変してそのまま逝ってしまった。

れた。当直の保養園でその知らせを聞いて茫然とした。確かに重篤ではあったが、発症前日に園内を一時間ほど散歩されたというSさんが僅か十日の内に亡くなられるとはまったく予想していなかった。とても無理だと思っていた病理解剖をご家族は「叔母もしていたたくと言ったと思います」と快く承諾してくださった。涙が出るほどうれしかった。病理学的な死因の解明を待つて、あらためてSさんのご霊前にて報告申し上げたいと思う。

いかにご高齢で難病によるものではあっても、患者さんの死は医師にとつて常に敗北である。ハンセン病に罹患し想像を絶する苦難を負いながら耐えに耐えてよくぞここまで黙々と生き抜いてこられた高潔な人格との交わりは稀有のものである。もつともつとお話を伺いたかった。社会から忘れられたようなハンセン病療養所にこんなに素晴らしい方々がおられることを特に若い人たちには紹介したかった。一日でも長く生きていたできたかった。Kさん、Nさん、Sさん、いずれもそこにおられるだけでそのご存在による安心感と平穩があった。ここからの感謝を捧げたい。ただ、彼らの不在による喪失感と淋しさは尽きない。松丘に来て日が浅い私でさえそうだから、長年苦楽を共にされたご家族や療友の方々の想いは如何ばかりかと思う。お慰めを祈るばかりである。

最後にこの間出会った先達の言葉を引用させていただく。

「麦の穂を力に掴む別れ哉」芭蕉

「死は別れではない。もつともつと深い出会いでもある。」山浦玄嗣

「亡くなつてからのその人に対する愛着というものは、思慕というものは、生きているそれとは比べようもないほどに大きいものではあるが、石に刻もうが、紙に刷ろうが、消える時には消える。ただ語りつぐ人々のいる限り、人は生きている。」淡谷悠蔵



松丘保養園に赴任して

薬剤科長 保田栄一

昨年四月に札幌から仙台へ転勤となり、宮城県人となりました。今年さらさらに松丘へ転勤となり青森県人と、道民を五十年以上標榜してきた自分にとつては、ケンミンと慣れ親しむには、ドーミンを忘れなければならず、心の底で小さな抵抗を感じています。

青森は、馴染みの深い駅です。私の父は国鉄釧路車掌区の車掌だったので、子供の頃運賃が半額になる家族割引を利用し、東京行はいつも国鉄でした。釧路を午後二時に発車する「特急おぞら号」は函館へ夜中の零時ちようど、連絡船に乗り継ぎ青森到着は早朝四時三十分、上野行「特急はつかり号」、「特急みちのく号」は午前四時五十分発、五十三分発とわずか三分間隔で走っていました。当時の上野行特急は十三両編成と長く、自由席車は上野寄先頭三両のみ、つまりホームを十両分荷物をかかえて、全力疾走しなければならず、これは上野から帰ってくる時にも連絡船の升席を確保するために長いホームを走らなければなりませんでした。

この頃の青森駅には、伯養軒の弁当販売がどのホームにもあり、黒山の人盛りで繁盛していました。上京の都度、弁当を確保しながら席も確保するために何度この青森駅のホームを走ったことか。新幹線が八戸まで延伸する時に、ジェーアールは新幹線の愛称を全国から募集しました。鉄道ファンの投票集計結果は、やはり「はつかり」がトップでした。しかし、ジェーアールは結果を無視して、廃止されていた寝台特急「はやぶさ」の愛称を強引に採用してしまい、鉄道ファンの青森新幹線への期待が裏切られました。

赴任した最初の土曜日、新青森駅から電車で浅虫温泉へ行こうと計画し、保養園の宿舎から徒歩で駅に向かいました、初めて松丘に来た時（業務の引継連絡のため）往復タクシーでしたが、運転手さんから歩いて近いよと言われ、本当かなと歩いてみると十数分位だったでしょう。確かに近い、松丘保養園は全国で新幹線に一番近い国立療養所（病院を含めても）であると確信しました。

駅の南口にほど近い高架橋に看板があり、六七四キロ七五三メートルと東京駅からの距離が書いてあります。（やはり遠いんだ…）

在来線の新青森駅には、「特急つがる」が停車していました。昔は「急行津軽」といつて寝台車、一等車、普通車からなる奥羽本線経由、上野行の名門（一部では出世列車とも呼ばれていた）列車でした。時は流れカラフルな塗装になって今風の電車ですが、何となく味気のない電車だなど思います。新青森↓青森間は特急料金が不要で乗車券のみで特急を利用できますが、地元へあまり宣伝していないのか知らない人が多い様に感じます。

さて、わずか六分の走行で終着、青森駅に到着です。実に二十五年ぶりのホームですが、人影もなく、かつて十三両編成の特急がたくさん並んでいた活気もなく、ホームにはポツリと八甲軒という立喰そば屋がありました。めかぶそばという初耳のそばを注文すると生姜を入れてよいですかと尋ねられました。めかぶそばとは温かいそばの上に、たっぷりのめかぶとすり生姜のつかっていました。いかにも浜の味で、これは冷やしなめこそば風にアレンジすると涼麺でも美味しいと思います。体もあつたまつたので、ホームの端まで歩いてみました。北海道側先端には連絡船への棧橋連絡橋が残っていました。ホームからの入口には、錆びたシャッターが閉じたままでした。でも残っているだけでよいかと納得しました。また八甲田丸の記念館にも是非一度、乗船してみたいと思います。

松丘保養園薬剤科に赴任して、昔、青森駅のホームを一生懸命走ったように、仕事も一生懸命がんばりたいと思います。保養園の皆様方、どうかよろしく願います。



就任の挨拶

福祉室長 高山 忠久

この度、平成二十五年四月一日付で、国立療養所松丘保養園会計班長から福祉室長に配置換になりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私の生まれは、福島県の郡山市で、その後父親の転勤等もあり、小中高とも仙台の学校を卒業しました。現在も、両親は仙台市内に在住しております。私自身は、関東の大学を卒業した後、仙台の民間企業に勤務し、昭和五十九年十二月に国立郡山病院（後に国立療養所福島病院との統合により閉院）に採用となり、その後、国立療養所山形病院、国立療養所翠ヶ丘病院（現在は国立病院機構いわき病院）、そして平成十四年四月に当園会計班長として着任しました。

松丘保養園勤務の内示を受けたときに、頭をよぎったのは、福島県から青森県へ異動するということもあり、学生時代に読んだ「日本語への希望」（金田一春彦著）に書かれていた青森県と福島県の言葉の違いはポルトガル語とスペイン語ほどの違いがあるという部分でした。今から三十年以上も前に書かれた本ではありますが、地方の人は別々の国の言葉ともいえるような共通語と方言を使い分ける、といった内容であったかと思えます。確かに、ネイティブな方々同士の会話の中には、ほとんど理解でき

ない部分も多々ありました。

しかし、それ以上に最初の一年間で強烈な印象を抱いたものは「雪」でした。「雪は箒で掃くもの」程度の認識しか持たない前任地から、「雪は片付けるもの」の青森の地のギャップ、官舎の雪かきも降雪シーズン当初には、二月・三月にはどのような状態で雪を積み上げているかのイメージを持ちながら片付けなくてはならない等、それまで経験したことのないことばかりでした。松丘に来て十年以上になりますが、未だに冬が近づいてくると、絶え間なく降りしきる雪を想像し、憂鬱な気分になります。もともと、それだからこそ、以前まではさりげなく訪れていた春が、こんなにも切望させるもの、そして大きな安堵感を与えるものとなっています。

これまでは、会計班長及び施設管理班長として様々な会計業務、施設管理業務に携わってきました。私が松丘保養園に着任してからは、建物集約化も大きく進み、東側一般寮や第四センターは解体され、また、中央センターが建てられ、治療棟各科の多くが移転しました。入園者の皆様の診療環境が大きく変わるにも関わらず、色々とご協力をいただき、ありがとうございました。

今後は、福祉室の職員として、入所者の皆様が安心して療養生活を送られますよう、これまでに以上に努める所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。



新任の挨拶

会計班長 大木良夫

この度、四月一日付をもちまして、当国立療養所松丘保養園に異動になりました大木良夫と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

出身地は山形県の米沢市です。平成元年に、現在は岩手医科大学に経営移管された国立花巻温泉病院に採用になり、その後厚生本省に異動、国立病院部、健康政策局に六年間勤務し、その後は東北、北海道の国立病院を周りました。前任地は福島県の国立病院機構いわき病院ですが、その前は同函館病院に勤務しており、再び大きく北上し青森県で勤務することになりました。この度の青森県における勤務により北海道と東北の全ての道、県で勤務することになりました。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、いわき病院は太平洋の海岸線からわずか百メートルの場所にあり、一昨年の東日本大震災では津波が院内に侵入し、職員の自家用車は多数流され、私の目の前には病院より海沿いにあった家の二階部分が流されてきました。病院周辺では死傷者も多数出ました。院内で死傷者はなかったものの、ライフラインの寸断、福島第一原子力発電所の事故の状況が不

透明になったことにより、患者さんは東北、関東の国立病院等に全員避難、私も自衛隊のヘリに乗り茨城県土浦市にある霞ヶ浦医療センターに向かった次第です。本省、東北厚生局、国立病院機構の病院と周っている私ですが、ハンセン療養所の勤務は初めてになります。三月末に初めて当地を訪れたときまず驚かされたのは、敷地の広さでした。次元の違う広さという印象を受けました。

会計業務は採用された花巻温泉病院以来となり、今、昔の記憶をたどりながらさらに勉強をしているところです。皆様のお役に立つどころかえってご迷惑をかけてしまうこともあるかと思いますが、入所者の方のよりよい療養環境の提供のため、微力ではありますが、頑張る所存でありますのでよろしく願いましたます。



新任のご挨拶

臨床検査技師長 杉本隆幸

この度、四月一日をもちまして、国立療養所松丘保養園に移動になりました杉本 隆幸と申します。どうかよろしく願います。

私の出身地は北海道の美幌町です。網走市と北見市の間に位置しています。

高倉 健主演の映画「幸福の黄色いハンカチ」で、美幌峠から見下ろす屈斜路湖が映しだされています。現在は函館のベットタウン七飯町に住んでいます。

最初の勤務は非常勤勤務ですが国立登別病院、次の国立療養所北海道第一病院（七飯）にて採用となり、北海道ガンセンター（札幌）、国立函館病院、北海道医療センター（札幌）と転勤があり、今回、初めて北海道から東北の勤務となりました。青森県は新幹線開通が二〇一〇年、函館も二〇一六年開通予定で益々青森が近くなります。また東日本大震災を契機に大間原発が函館と最短二三kmであり話題のニュースとなっています。津軽海峡を挟んで函館立待岬から青森が見えますので非常に近いイメージがありました。車での移動ができない不便さも感じています。前回の札幌勤務では七飯町まで約二四〇km、車で約四時間三〇分、JRで

は乗り継いでやはり約四時間三〇分です。今回の勤務地七飯から新青森まではJRで乗り継いで約三時間弱と近くなつた？と自分に言い聞かせています。北海道も寒くしばれますが、青森のこの一帯は豪雪地帯と聞いております。北海道に住んでいても寒さには弱く着ぐるみのように厚着をし、部屋を暖め冬を過ごしていきますが青森も同じように過ごすことになると思います。どれくらい豪雪なのかちよつと不安です。これからの時期は弘前の桜、そして青森ねぶた等東北の散策も楽しみにしています。

ハンセン療養所は北海道にはありません。東北にあるのも知りませんでした。ここに来てハンセンの歴史、国の誤った政策が教えられました。まだまだ勉強不足ですが検査技師として入所者の皆様の健康維持のため、微力ではありますが松丘保養園の医療のお役に立てるよう努力する所存ですので皆様宜しくお願い致します。



新任のご挨拶

栄養班長 瀧澤 豊

この度、四月一日付をもちまして、当国立療養所松丘保養園に異動になりました瀧澤豊と申します。どうかよろしくお願い申し上げます。

私の出身地は岩手県です。岩手の実家には、両親二人が暮らしています。何もないところですが、自然だけは豊富でとても良いところだと（自分では）思っております。また自宅は、仙台市にあります。仙台とは言っても泉区ですので、泉ヶ岳があり、これまた自然に恵まれて、適度に人間もいて・・・、とても良いところだと（自分では）思っています。

昭和六十年二月 国立療養所秋田病院に採用され、国立療養所道川病院（現在あきた病院）、国立療養所米沢病院、国立療養所秋田病院、国立療養所東北新生園、国立郡山病院、国立療養所福島病院、国立療養所西多賀病院、国立療養所山形病院、国立療養所花巻病院、国立療養所宮城病院、国立療養所花巻病院、国立療養所東北新生園に勤務いたしました。

給食棟移設に伴う中央配膳化、摂食・嚥下困難な方への食事の取り組み、入所者の方に喜んでいただける食事の提供など、やらなければならぬ事がたくさんあります。一つひとつを確実に実行していきたいと考えています。

最後に、入所者のみなさまに、安全・安心でやさしい食事の提供に微力ではございますが、全力を尽くし努めて参りたいと思っておりますので、皆様どうぞよろしくお願ひ申し上げます。





新任のご挨拶

看護師長 伊藤悦子

この度、四月一日付けをもちまして独立行政法人国立病院機構八戸病院から転任してまいりました病棟師長伊藤悦子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

一日も早く仕事、環境に慣れるよう毎日が奮闘と葛藤の毎日です。転任当初、園内の広大な敷地と自然豊かな環境に驚きと戸惑いを感じました。方向音痴の私にとってかなりの難題であり、いまだに園内を迷ってウロウロすることも有ります。先日地域町内の皆様とのクリーン活動に参加しました。住宅地にありながら園を杉、松の森林樹が取り囲み市内が見渡せる環境のすばらしさにさらに驚きました。リスがでるとも聞きましたがまだお会いしておりません。(楽しみにしているのですが…)

私の出身地は弘前市です。生まれも育ちも弘前の根っからの津軽女です。昭和五十二年に国立弘前病院（現独立行政法人国立病院機構弘前病院）に採用され、国立療養所盛岡病院（現独立行政法人国立病院機構盛岡病院）に師長昇任その後再び弘前病院、八戸病院に勤務し、この度当園に転任となりました。

振り返りますと盛岡病院、八戸病院勤務時は週末に弘前に帰る生活となり高速道路から見える景色で季節の移り変わりを感ぜ、岩手山には雄大さと勇氣をもらい、岩木山には安らぎ癒やされておりました。現在は弘前から車で約一時間の通勤をしております。

国道七号線の渋滞と冬の到来時に必須の雪による視界の悪さが今から不安です。

新採用者研修の中で当園の理念は「一人ひとりが歩んできた道のりと生命の尊さを深く認識し地域の人々とともに歩む豊かで心安らかな療養環境の提供に勤めます」と聞きハンセン病の長い歴史を物語る理念と痛感しました。当園で勤めさせて頂くにあたり、まずはハンセン病の歴史を理解することからと考え手にした本があります。それはハンセン病訴訟原告 笹 雄二著書「わすれられた命の詩」という本でした。

そこには「長く暗いトンネルからやっと抜け出て人間の空を取り戻した」というタイトルがついておりました。著作者の母、兄の発病と自分の発病、そして家族との別れなど壮絶な半生が綴られ胸が締め付けられる思いで夢中で読み切りました。ハンセン病の歴史、知識ともにまだまだ勉強不足ですが、正しい知識と理解を持つて日々の業務にあたつて参ります。

当園の理念に従い入所者の皆様一人一人が歩まれた道のりを思い安心して療養生活を過ごして頂きますよう一生懸命頑張つていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



新任の挨拶

看護師長 木浪 真貴子

この度、四月一日付をもちまして、独立行政法人病院機構あきた病院から国立療養所松丘保養園に異動になりました木浪真貴子でございます。中央センター2階の師長として一日も早く松丘保養園に慣れ、入所者一人一人に良い看護が提供出来るよう努力いたしますのでよろしくおねがいします。

私の出身地は、青森市です。実をお話ししますと私は松丘保養園が初めての勤務ではないのです。

今からさかのぼること三十年前、青森市の看護学校を卒業と同時に松丘保養園に入職させていただきました。がその当時は、青森市原別に住んでおり車の免許をもつていずバス通勤でした。そのため通勤距離が長いこともあり一年足らずで松丘保養園を去ることにしました。その後、旧青森病院（浅虫）へ入職し結婚しました。結婚した方が油川の方ということもあり、今度は逆に浅虫から油川まで通勤しなければなくなり、松丘保養園を退職したことを悔やんだのを覚えております。

その後、統廃合や合併などの政策により浪岡にあります青森病院での勤務とな

りました。青森病院には、七年間お世話になり、その後看護師長に昇任となり秋田県の由利本荘市にあります、あきた病院での勤務となりました。

あきた病院は、神経難病・筋ジストロフィーと重症心身障害児（者）病棟合わせ三四〇床でした。病院は、小高い所にあり、前は日本海を望み夕日が素晴らしく夕日が落ちるのをいつもみていました。また遠くには、烏海山が望め風光明媚なところにあります。現在外来棟、管理棟を新築している最中です。出来ましたら一度見に行きたいと思っております。そして週末の金曜日、勤務が終ると車で四時間かけ毎週のように青森に帰ってきました。春から初秋にかけてはちよつとしたドライブをたのしむように四季を感じながら秋田、青森間を往復しましたが、冬も車を使用しましたので、それはそれは恐ろしかったです。あきた病院のある周辺は青森のように雪は多くありませんのでどうにか走ることができましたが、矢立峠あたりから景色が一変、雪の量が違うことを痛感しました。そのような生活を四年間続けてきました。

今回、松丘保養園勤務となり、自宅からは一〇分の通勤です。自宅から通勤できる喜びを感じています。それと同時に三十年前に一年間だけ勤務した職場に来ることができたことは、松丘保養園と私とご縁があったのだと感じています。このご縁を大切にして入所者の方々に多くの笑顔が見られる様、一生懸命看護に取り組んでいきたいと思っておりますのでよろしく願います。

☆松丘のニューフェイス☆

四月一日から当園で働く皆さんにアンケート形式で自己紹介をお願いしました。

みなさん、どうぞよろしくお願ひします。

(順不同)

①名前

②勤務場所

③得意な歌

④最初に覚えた入園者のお名前。その理由。

⑤一言挨拶



①石村 いしむら としこ
敏子

②盲人会

③中島みゆき「時代」

④福浦神さん。

毎日、盲人会へ誘導により来館されています。



①對馬 つしま ゆきこ
由紀子

②第一センター

③イルカ「なごり雪」

④並木かよさん。

声掛けの問いに逆にねぎらいの言葉をいただきました。

⑤私は、今まで他医療機関にて介護職員として勤務してきました。過去の経験を生かし又、初心の気持ちに戻り日々の(業務)仕事に取り組み努力していきたいと考えております。



① 工藤 夕湖
くどう ゆうこ

② 福祉室

③ B E G I N「島んちゆぬ室」

④ 石川勝夫さん。

初めて一般寮へ郵便配達に行った時にお話をさせて頂いたので。

⑤ 少しずつ慣れてきたのか最近では園内で迷うことが少なくなりました。沢山ご迷惑をおかけすると思いますが、精一杯頑張りますので宜しくお願いします。



① 鶴谷 柾人
つるや まさと

② 第二センター

③ 童謡

④ 松本友造さん。

とても元気で笑顔が印象に残っています。

⑤ 四月一日付で看護助手として採用になりました鶴谷柾人と申します。人生経験も少ない未熟者ですが、入所者の皆様の身のお世話やお手伝いをして多くのことを学んでいきたいです。



① 石村 春美
いしむら はるみ

② 中央センター二階

③ 今井美樹

④ 大見ヤスさん。

元気な声で励ましの言葉を掛けてくれたから。

⑤ はじめまして。新しく入った石村です。私は、日用大工や縫い物、家庭菜園が好きです。時々、集中し過ぎて食事を摂る事を忘れてしまいます。こんな私ですが精一杯、頑張ります。宜しくお願いします

「わたしはあなたの空になりたい」

短歌

白樺短歌会

病み衰えて

滝田 十和男

熟年をはるかに過ぎて在るいのちいつくしめとぞ庭の花燃ゆ
かけめぐる痛みいや増す夜の更けに眠りぐすりを飲ませてもらふ
わきあがる雲のごとくにかけてめぐる体のなかの痛みすべなし
長らひていのち安けくあらざればマリアの祈る像のかたわら
ひたすらなマリアの祈りにより頼むこころ貧しき者そのままに
罪びとの貧しき祈り聴き容れて今宵はすこし平穩にをり
病みきたる長き月日のそのほかは捧げるものを我は持たざり
十字架の重さこの身に頂きて今日も生きなむ痛みこらひて
かけめぐる痛みにいつもキリストのゴルゴタのぼる坂道おもふ

言葉にはならぬ感謝のきわまりに眼を伏せ祈るロザリオの球
守られてきたるいのちを尊しとつくつく思ふ病み衰えて
介護の手厚くこの身に注がれて病み呆けがちに日を送るとも
松丘にわれの一生は在りしかな丘に育ちし樹々の梢も
生きられるだけ生きぬこう自らを励まし祈る独りの部屋に
信仰をもつ幸せにつつまれて逝きしひとりと思ふときあり
手を合はせ祈る聖母の立像の傍らに病む救い信じて
駆け巡る痛み和らぐ日の無くて平成二十四年の秋は過ぎゆく
苦しみは口にしがたく横たはる枕の位置を変へてみるのみ
ひと粒の睡眠薬に頼る夜の夢に出できし亡^っ妻若^ま若し
年賀状も書かずじまひの年の瀬を詫びつつ何も手につかぬ日日
遙々と乳飲み子連れて会ひに来ぬわれの安否を確かめたくて

想うこと

K R

この病いとつきあい もう55年になる

父もなく 母も見送った

70歳にもなり ここでは若いもんと言われる

長生きとは そういうことなのか

監獄の時代から 電化時代の生活へ

変われば変わったものだ

折々の変化についていけず

唯々傍観して来ただけだ

農家に生まれた

子供や孫に囲まれていたのだろうか

つきあい方さえ想像できない

病気になってしまったから

生き方が変わってしまったのか

環境は確かに変わったが

選択の物差しが見つからないのだ

昨日の延長でいいのか

明日への希望はあるのか

今日 納得できればいいのか

歩ける幸せ

見えるよろこび

土の感触も伝わってくるし

育てる苦労も味わえること

誰もが体験できることではない

小さな 身近な この瞬ときを

私は今

大切にしている

川柳 伯龍

身内より 真心通う介護の手

「おはようさん」朝一 ナースに笑顔あり

今年また 土の感触 足の裏

療友が 癒しで集う 花の園

カラフルな 錠剤数え 食べる友

俳句 伯龍

散歩道 野辺のタンポポ 居場所あり

掻く雪に 晩酌甘く しみわたる

大輪の ダリア花咲く ふるさと路

もくもくと ただもくもくと 雪捨てる

紅葉映え 終の住栖すみかの 冬支度

伯龍への思い



伯龍庵の陶器の数々

祖母との思い出

三浦 喜美子

私が小学校五年の時に両親より重大な事を二つ聞かされました。

一つは前に記したが、従姉と思つて居た人が長女であつた事。

小学五年の小正月が過ぎた頃、祖母は毎年近所の方々と山形県の湯田川温泉に十二日間湯治に行きました。早朝に父と姉と一緒に荷物を持って送つて行き、父と姉が帰つて来ました。その時、父は私達姉妹を集めて話を始めました。

祖母は本当の母親でない、と言つた時、私達はエーッと騒ぎ出しました。

母には最後まで黙つて聞くように、と叱られました。

父の本当の母は、一人娘で婿を隣の部落から貰い、父が小四、妹小一、末妹六才の時、風邪が元で急死。その時の祖父・母の悲しみは大変なもの

だつたそうです。

これから記すのに、私は祖母のことをB子と記す事にします。

父が小五の時に今の母（祖母）が来てくれました。B子は結婚して十年目で子供が出来ず離婚して実家に帰つて居たそうです。親戚の方の紹介で家に来てくれたのです。

当時は結婚して三年たつても子供が出来ないと、自分から身を引くか又嫁ぎ先より追い出されたとの事。今では考えられない事です。

B子が十年も嫁ぎ先より出なかつたのは、嫁ぎ先で承知してくれなかつたとの事。その訳は、氣立ても良く、美人で又良く働き、手先が器用であつたとの事でした。B子はこれ以上甘える事は出来ない、無理に家を出たとの事でした。

子供生んだことがないのに、子供の扱いの上手

な事、父や妹達はすぐにB子に懐いて、特に上の妹はB子のそばを離れようとせず、下の妹を寄せつけず、一人占めにしていたとの事です。その妹は結婚してもよく遊びに来て、B子に甘えていたのです。サラリーマンの次男に嫁いだ事もあり、子供が出来なくても離婚する事もなかったのです。

母は長男を生んだ時より、乳は一滴も出なく産後の休みが終わると子供を祖母に一任し、早朝より夕方まで若者と同様に働きました。長女が生まれた時、両親は祖母の名前（安江）の一字を貰い、安子と命名しました。私達七人兄妹は祖母に育て貰い、大病することなく人並みに育ったと感謝しております。

叔母（父の上の妹）は次女が生まれると長女を養女に欲しいと言ったのです。祖母、父は賛成しましたが、母が反対しました。三女が生まれて半年後に長女が養女に行きました。叔母は次女、三女では駄目で祖母の名前の一字のついた長女でないとは承知しなかったのです。母は長女だけは、どうしても手元に置きたかったのですが、祖母、父に負けたのです。乳の出ない母、嫁の立場等あつ

たのでしよう。

父は時々酒を飲んで夜遅く帰って来ました。私達姉妹は祖母と一緒に部屋で寝ていました。父は帰ると必ず祖母の枕元に来て、

「今帰りました。遅くなつてすみません。」
すると祖母は、

「お役目ご苦労様。すぐお休みなさい。」
と言うのです。

私はその時は、何時も目が覚めました。何故父を叱らないのかと不思議に思いました。

ある寒い晩、今晩もまた父が遅いと、皆やすみました。三十分位たった頃、珍しくしつかりした足音で帰って来ました。祖母の枕元に来て、

「会議が長くかかり、夕食をとつておらず、ご飯を食べさせて欲しい」との事。

祖母は、それは御苦労と、すぐ台所に姉と立ちました。私も行つて手伝いました。

その時祖母は姉と私にくず湯を作ってくれました。その美味しかった事、今でも忘れられません。

学校から帰ると祖母は私達の四季折々の着物を縫っていました。当時は男女共、私服で通学して

おりました。祖母の作ってくれるものは、着やすくて体に合っていました。手早くアツと言う間に出来上がるのです。道草せずに帰って来てくれ大変助かる、と言って必ず、おやつを用意してくれました。当時はお菓子ではなく、オニギリや餅の焼いたものでした。祖母はそれから十一人分の夕食を作るのです。掃除する人、風呂に水を入れる人、魚を焼く人、それぞれ一生懸命に手伝いました。何をやっても誉めてくれましたので、明日はもっと上手に掃除しようと思ったものです。

祖母は大鍋の煮物もアツという間に作ります。その美味しい事、手早く出来るのには驚いたものです。母も仕事から帰って来ると必ずお前達が手伝ってくれて有り難うと、言ったものです。

夕食の片付けも、祖母と私達でした。母は洗濯をしたり、明日の仕事の準備でした。母は洗濯

包丁は勿論の事、農作業で使うカマ、ナタ等は父が研いでも切れなくて、何時も祖母の仕事でした。父はどうして不器用なのかと子供ながらに思っていました。納得したのです。祖母は日曜日には私達の髪を整えたり、顔も剃ってくれました。

近所に住む祖母の友達の顔も剃ったり、髪を洗って整えてあげていたのです。

秋の遠足は全校一同高原に決まっていました。

通学の弁当も美味しいですが、遠足の弁当は更に美味しいのです。色取りも味も良く、祖母に感謝して頂きました。遠足の時は、センプリを摘んでくるように頼まれておりましたので、姉と沢山摘んで帰ると祖母は大変喜んでくれました。

必要なものがあると、父に相談しました。父は祖母にまかせ、祖母は母と共に話を聞いてくれました。何事も上手に出来る祖母こそ我が家の大黒柱でした。

運動会は学校だけの行事でなく、村の一大イベントになつていました。どここの家庭でも前日より御馳走作りで忙しく、毎年五月中旬と決まっていました。留守番一人残して、早朝より会場へと向かいます。校庭は狭いので少し離れた山の中腹に、この日だけ使う広い運動場がありました。毎年一番の方々が数日前より掃除してくれました。座る場所も各部落毎に決まっています。

早朝より行事が進み、子供達が終わる頃より、婦人会、青年部等の行事が始まります。年配の方々は早々に友人達と酒盛りが始まり、その賑やかな事！最後には、東西の青年部の綱引き大会で幕が下ります。

母は運動会の会場には一回も来たことがありませんでした。運動会当日は、母の姉、妹達が我が家に来て、誰にも気兼ねなく、ゆっくり御馳走を食べ、話をするのが唯一の楽しみでした。

私が小一の時、祖母がお伊勢参りに参加する事になりました。本家のおばあさんと市内に集まり、十日間、いや二週間位だったと思います。

当時は交通の便が悪く、どのようにして行ったものか、子供だった私にはわかりません。

その当時は、今思えば外国にでも行く様な気分だったのではと思われれます。その後数年たつてから父も行ききました。母にも行く様に祖母、父が勧めでも行きませんでした。

祖母のお土産には驚きました。母、叔母、私達姉妹に半襟を買って来てくれたのです。その美し

さに目を見張りましたが、それ以上に、私達に前掛けも買ってきてくれたのです。その手触りの良さ、美しく綺麗な事、初めて見る品々。東北の片田舎では見ることはありませんでした。

小学四年生になると、女は裁縫が始まります。

その時必ず使う、布に標しをつけるへらを私達姉妹一人一人に買って来てくれました。姉には裁縫箱も買って来ました。お伊勢参りの後、京都見物をして、お土産を買ったとの事です。姉に地図を見せて貰い、京都とはどんな所か、私には別世界ではないかと思いました。

祖母の真心のこもったお土産、当時のあの喜びは、今でもはつきり覚えております。

私が高等科を卒業した運動会の時でした。帰つて来ると、母が上機嫌なのに驚きました。姉妹と会つて、よほど楽しかったのでしょう。

夕食を食べ始めた頃、母はニコニコしながら父に向かつて、「すぐ下の妹の一人息子の所に三女を嫁に欲しいからよろしく」と、言っていたと言う。

父、「復員して来たのか？」

母、「まだ帰ってないが、妹は入退院を繰り返しており、三女を家から通学させますから、そばにいてくれるだけで良いから頼む」、と言います。

父は、「復員して来た時の話ではないか、全く話にならん」と大声で言った。

母のあの笑顔は消えて、大声で、「自分の妹には、私が反対したのに長女を養女に出して、私の妹には冷たいのだから！」と言う。

父は酒の力もあつたのか、一段と大声で、「それとこれとは話が違ふ、お前の妹は頭がおかしい、全く話にならん！」と自分の部屋に行つてしまつた。

その時祖母は母に向かつて、「大事な話は今晚ではなく、後日にした方がよかつた」と言いました。

母は無言でお勝手の方へ行きました。

私は、夕食を食べたような気がしませんでした。

皆は疲れもあり早々に床に入つてしまいました。

楽しかつた運動会も一変して吹き飛びました。

母が大声を出し、父に向かつて行つたのを初めて

聞いたような気がします。

私は不思議に思いました。二女がいるのに、な

ぜ三女なのか？叔母は二女を欲しいと言つたのに、母が三女と言つたに違いない。母は二女を一日も長くそばに置きたかつた。叔母はどちらでも良かつたのだ。私は叔母の家に行くつもりは毛頭なかつたので、父が反対してくれ安心しました。

数日が経つたある日、この事を母に聞いてみました。母はびっくりした様で、「お前、そんな事を考えていたの、あきれた子だ。二女はあの通り、背が特に高く、甥（叔母の息子）は二女より少し背が小さいので、初めから三女と言つていたのだ」との事。私は従兄とは会つたこともなく、写真も見た事がない。先方だつて同じ様に思つている、と言つた所、私の写真は前もつて渡してあるから、お前の心配する事ではないとの事。

私は驚き、全くあきれてしまいました。母の妹思いには、自分の子供以上だと思ひました。叔母の嫁ぎ先は、家も立派で大きく、財産もあるが、病弱の故子供も一人しかなく、お前が嫁ぎ妹を助けてくれるよう、何度も言われました。

私は無言で聞いていました。この場で私の意見を言つたら、母、叔母がどうなるかと思うと無言

でいるしかなかったのです。

母は実家に行くと、妹の家にも行き一晚泊まってくる事も度々ありました。兄姉の中でも、特に母はすぐ下の妹と一番仲が良かったのです。

それから半年後の十一月中旬頃、従兄戦死の電報が届きました。その時の母は悲しみのあまり、その場から動けなくなったほどです。

葬儀から帰った父は、叔母は病気が悪化し、兄弟が病院に行ったので、母は何時帰って来るかわからない、と言った。それから二、三日後に叔母の死を知らせる電報が届きました。

半年前のあの騒ぎは一体何だったのか。人騒がせな叔母でしたが、可哀想な叔母でもありました。

母が、叔母の一周忌の法要から帰って来ると、義弟が子連れの人との再婚が決まった、とのこと。これで叔母の家とは縁が切れた、淋しいと言いました。

その時祖母は、「一人ぼっちの旦那さんが可哀想だと思っていた。再婚が決まり良かった、亡くなった妹には申し訳ないが、喜んであげるべきだ。」と言いました。

父、母を見送り、祖母は八十七歳でアツと言う間に亡くなりました。私達兄姉は翌年の祖母の八十八歳のお祝いの事を話し合っていた最中でした。百歳までは生きると信じていたので残念でした。

父、昭和三十七年六月四日、母、昭和三十八年九月二十日、祖母、昭和三十九年六月八日亡くなりました。兄は三年続いての葬儀たいへんだったでしょう。私達姉妹は手先の器用な祖母のお蔭で四季折々の清潔な着物を着て通学出来た事を感謝しております。一も祖母、二も祖母と口にこそ出さない両親でしたが、日常の生活に溢れていました。七人兄姉中、妹二人と三人だけになりました。帰郷した時は二人の妹と話し合って当時を懐かしく思い出しております。

私も老婆です。思い出に何時まで耽っていられるのか……

あの世に行ったら、一番に祖母、両親に会えることを願って下手なペンを置きます。

ぶらり金沢く夜行列車と近江町市場く

耳鼻科 丹藤 淳

平成二十五年二月二十一日（木）より二十二日（金）の日程で日本静脈経腸栄養学会JSPEN 2013 金沢が開催された。

金沢は若い頃から何度も訪れたわりと身近な存在である。兼六園を始め著明な観光地が点在し、城下町らしい気品あふれる工芸品の数々、富山湾からもたらされる海の幸、加賀野菜などの独特な山の幸が豊富でいつ行っても楽しめる所だ。

そんな金沢と私を結びつけてくれた寝台特急日本海が昨年三月で廃止された。青森発大阪行き寝台車は北国と関西をつなぐ手軽な交通機関だった。話がわき道にされるが、昼間移動するのはすごく損をした気分になるのは私だけだろうか。夜間のイベントが目的でない限り、できるだけ日中の移動はしたくない。特に夜行列車や夜行バスは、睡眠と

長距離の移動が同時にできるとても便利な交通手段だと思う。それに経済的にも安く付くのであるから言うことはない。それに何より飲んべえの私にとっては酒が飲めるのが良い。心置きなく飲んで寝る事ができる。昼間移動しているとそういうわけにいかない。特に東京あたりに新幹線で行くと下手をしたらついてそのまま会場入り、飲むどころではない。こんな事を書くとお叱りをうけそう



金沢駅のシンボル“鼓門”

だがやつぱり時間ももったいない。

残念ながら夜行列車は消えゆく存在である。逆に夜行バスが手軽な長距離移動手段として増えている。ちなみに青森と東京を結ぶ夜行バスは弘前からのものだけでも五社くらいあるようだ。値段も片道五千円からとお値打ちだ。体力に自信があり、手軽に遠くに行きたいと思うならバスである。今回は青森から仙台の昼行便にのり、仙台からの夜行バスに乗り換えて金沢に向かった。なかなか快適なもの乗り継ぎは一苦労である。

だいぶ話が逸れたが、今回金沢に行ったのは先にも述べたように静脈経腸栄養学会に参加するためである。特に昨年の神戸学会と異なり、看護師としてはもとよ



JSPEN in 金沢 山中温泉病院院長 大村先生と

り、新たに取得した「栄養サポートチーム専門療法士」(NST)専門療法士」としての参加である。NST専門療法士は医療機関の中で栄養の事を中心に各職種が連携して対象者の栄養を円滑かつ効率的に支援する資格者である。管理栄養士、看護師、理学療法士、言語聴覚士など一定の要件を満たしたものが取得できる。

NST専門療法士の多くは管理栄養士であり、看護師は少ない。今回静脈経腸栄養学会看護師部会で割合の少なさが問題となった。それでも病院の中で看護師が栄養に詳しいことは非常に有意義である。また話が逸れるが、私の学会の時の寄り道時間は、空き時間にもよるが、三十〜六十分くらいが多いと思う。それがこのぶらりシリーズのネタ元になるのである。

今回は駅前周辺のホテルが会場で、けっこう満ち満ちとスケジュールが決められていたために兼六園などにはいけなかったが、金沢市民の台所近江町市場に寄ってきた。市場では冬の加賀野菜、加賀レンコンや五郎島金時(サツマイモ)、富山湾直送の寒ブリが所狭しと並んでいた。私的な楽しみは加賀麩

だったり加賀棒茶だったりするが、見ているだけで心が沸き立つ思いがする。個人的に旅の醍醐味はその土地の胃袋をのぞき込むことである。市場や町のありきたりの食堂で見かける地のものは何より興味津々だ。季節季節で違うその食材は、今この瞬間にしか出会えない正に「一期一会」だ。そしてとどめは地酒である。

風光明媚な風景数あれど腹が減っては楽しめない。酒がなくては楽しみが半分、だと思う。

金沢の台所を覗いてきて豊かな食材に浮き立ちながら、学会の最中にもかかわらず買い込んでしまい、持ち帰った袋を見て会場のクローク係が驚いていた。その大量の食材をバスに詰め込み帰りのバスに乗り込んで、一路青森への帰途について。

今回は学会でも多くの出会いがあり、たくさんのご縁を得た。学会に行くたびに多くの刺激と知識をしみこませ、地元栄養を取り込んで内外共に一回り大きくなって帰ってきた気がする。

最期に氷見のぶりが食べてこられなかったの、心残りとなったのか帰りのバスで大きなブリを釣り上げる夢を見てしまった金沢の旅であった。



近江町市場にならぶ富山湾の海の幸



“いつもの”1枚

野の花の微笑^{ほほえ}み

比良 信治

(5)

文太郎は、小路の坂道を降りてバス停へ向かった。バス停には、いつものように四、五人の男女が並んでいた。七時半といえば、出勤としては早い方である。この緑丘バス停からは、住宅街を見下ろして港の一角も見える。特に大きな船が着いた時は、汽笛まで聞こえてくる。

この港から続く坂道を、通称地獄坂と呼んでいた。昔は、緑丘あたり迄しか市街地はなかった。それが、明治の終わり頃にさらに四、五町登った地に、今の小樽商科大学を開校した。長い坂道を学生達が登り降りした。夏は汗をかいて登り、冬は雪道をこいで登るから、学生は年中汗をかいて登ることになる。とくに冬の坂道を降りるときは滑るので転ぶ学生が多い。いつのまにか、この坂道は、“地獄坂だ”といわれるようになった。

文太郎は、その商科大学前を始発したバスに乗って小樽駅前迄行き、乗り替えてオタモイ行きに乗る。オタ

モイとは、アイヌ語で砂浜に囲まれた船入溜という意味だそうだ。終点は断崖の近くで、日本海の荒々しい海が迫ってくる所だ。遠くに積丹岬、右手には石狩の連山が見える。かつて、京都の清水寺のように、崖地に柱を組んで竜宮閣という料亭を建立して、オタモイの景勝地は連日賑わった。が、昭和二十七年に火災を起こして焼失してしまい、今は波の音しか聞こえてこない。

文太郎のつとめる福祉施設は、その手前の閑静な地にあった。オタモイ育成園という老人ホームである。当時養護老人ホームが五〇人、特別養護老人ホームが一〇〇人の施設だった。

駅前から約十五分で施設に着く。彼はケースワーカーで係長だった。八時四十五分の朝礼には、園長の挨拶のあとに、その日の日程を述べる役割をもっていた。そのため、当直者より利用者の夜間状況を聞いて、朝から

の対応策も考えねばならぬため、少し早目に出勤するの
が習わしだった。

朝礼が終わった後に、木村園長室に入つて、青森の母
を見舞つてきた報告をして、お礼を述べた。白髪がめだ
つ初老の園長は、八戸出身であつたので、青森のハンセ
ン病療養所のことも承知していただだけに、母のことはか
くさずに報告していた。

「おふくろさんは元気だつたかや？」

「元気でしたので安心しました。しかし、八月のねぶ
た祭には来て欲しいというので、また行かねばなりません
が、よろしくお願いします」

と言つて、文太郎は紙袋を手渡した。中味は園長の大
好物の「津軽飴」だった。園長は細い目をハの字にして
笑顔で言つた。

「飴こだな。ありがとうさん。ねぶた祭はじつくり見
てこい。すごいエネルギーが、火花をぶつけ合つて格闘
するぞ。行つてこいよ。休暇をとつてな」

園長は心得たもので、文太郎の気持ちを探していた。
職員もざつくばらんな園長の指導に安心してついでいっ
た。いつも園長と話し合いをして進めるので、職場の中
は明るかった。特に老人施設の職員は、事務員や介護員、

栄養士、看護婦と女性が八割をしめているだけに、問題
が生じるとみんなて話し合つて解決していった。

青森から帰つて十日位たつた頃に、青森の清水恵子か
ら文太郎に手紙が届いた。

それによると、函館にいる兄が自動車事故に遭つて入
院したために、許可をもらつて函館に行くが、着いてか
ら電話をするかもしれない、という走り書きだった。

四、五日たつた夜に電話が鳴つた。清水恵子からだつ
た。兄は手術したが亡くなつたという。信号のない街の
中で、杖をついたおばあさんが横断しているの、兄は
車を止めて横切るのを待つていた。そこに突然右横から
トラックがガツシんとぶつかつてきて、兄は硝子を破つ
て外に飛ばされてしまった。前方不注意の衝突事故。兄
の体の胸部は破裂し、応急手術したが、間に合わなかつ
た。兄はおばあさんを助けたが、それが命とりになつて
急死した。

「お会いしてからお話すわ。今はあなたにお会いし
たいの。急にこんな気持ちになつたの。ごめんなさいね。
でもお勤めでしょうから、日曜を指して伺いますわ。

明日は土曜日ですけど、昼からはお休みですか？」

「普通は土曜も夕方まで勤務だけど、おいでになるな

らば、午後は休みを取りますから、お出で下さいよ。そちらを朝発てば昼頃に着く汽車があると思うよ。」

「あーよかった。行つてもいいのね。実は時刻表を見ているの。一時頃に着くがあるので、それで行くわ。」

「わかりました。ところでお泊まりは一泊？二泊？知つてるホテルを予約しておくから。」

「あー一泊ね。日曜の夜には療養所に帰つていないといけないの。慌ただしくてごめんなさいね。お願い。」

「じゃ駅に出迎えに行きますから、お待ちしていますよ。」

彼女の話によると、兄はひとり者だったので、姉夫婦の手で葬儀を済ませ、遺骨も姉夫婦の家に安置されているが、四十九日が過ぎてからF町の両親の墓に入るようにしたいと言う。姉夫婦の家に彼女が居る訳にもいかず、青森に帰る前に一目でも文太郎に会つて療養所に戻りたい気持ちになった、と言う。兄を失つた淋しさの心を誰かにぶつけて元氣を取り戻したい、という心境だろうと、文太郎は思いやつた。

清水恵子は予告通りの列車でやつて来た。駅の改札口の前に立つて手を振ると、彼女も手を振つて躍りあがつた。

薄黄色の帽子をかむっていたが、茶色の眼鏡を付けていた。白い半袖の服に、紺のズボン姿。右手に薄黄色のポストンバッグを持っていた。

「ようこそおいで下さいましたね。小樽は初めてですか？」

「ええ初めてよ。いつかは北の商都に来てみたかったわ」と言つて、彼女は天井の高い駅舎を眺めた。

「函館ほどじゃないけど、違つた商業の港町らしさがあるんですよ。」

「北のウォール街と言うんじゃないの。いつか週刊誌で読んだことがあるわ。」

文太郎は、彼女のポストンバッグを受けとつて歩きだした。

駅前に出ると、まっすぐな中央通りの突き当たり、赤煉瓦の倉庫群が見える。その前に青黒い運河があり、背後に港がある。ホテルは、五、六分の先にあつた。最初の賑やかな都通りはアーケードに包まれた商店街で、音楽や映画館の呼び込みの声などが左右から、賑やかに聞こえてくる。

まもなく中心街の中に二本の鉄道線路が見えてくる。

「この線路はね、手宮線といつてね、明治の初めに空

知の幌内炭鉱から石炭を、手宮棧橋迄小さな義経号や弁慶号の機関車で運んだ線路ですよ」

「あの、新橋から横浜まで走った頃なのでしょう？」

「そのあと神戸でも走って、何でも日本で三番目に汽車が走ったんですよ。たしか明治十三年だったかな」

線路を渡ると、次の道路には灰色の石造りの建物が並び、向い側に本州大手の銀行が並んでいた。次の通りが運河の通りである。赤煉瓦の倉庫群が青い運河の水面にも映って見える。その運河をつぶして、道路にしようという有力者が計画すると、市民の有志、中でも主婦層や若者たちが、運河を残して市民のオアシスにしようという反対運動が起きていた。文太郎はその話をしながら、小さなホテルに入った。

恵子がバッグを部屋に置いてくると、二人はレストランに入った。昼間のせいか、お客は少なかつた。

恵子は眼鏡をはずして席につくと、

「ああ、うれしいわ。ようやくあなたにお会いできて

—

彼女の微笑み、えくぼが愛らしかった。青森で会った時よりも若く見える、と文太郎は思つて見つめてみると、若いウエートレスが近づいてきた。

「生ビールね、いいでしょう」

「いけるんですか？ たのもしい」

「ちよつとね。飲みたいわ」

「何かとお疲れになつたのでしょうか。明日帰るつてゆつくりできないんですね」

二人はビールジョッキで乾杯して飲み始めた。

「兄はハンセン病じゃないのに、父やわたしが病氣持ちであるために、結婚がうまくいかずにひとり者の暮らしを続けていたのね。いくじないとも言えるし、可哀想だともいえるし、わたしを恨んでもしょうがないのね。」

「まわりがうるさいのね。どうしていつまでも、ハンセン病に対してしつこく嫌うのでしょうかね」

「わたしらの根性がひねくれて、曲がつてしまう程に、国や学校、いや社会も、ハンセン病はげがらわしいもんだ、くさい病だなんていうから、世間の人もそう思つて、嫌つてしまうんでしょうね」

「だから、ぼくはおふくろを家にひきとつて、なんでもないんだよ、と見せてあげたい思いを持つんだけどね」

「実際にはお母さんもハンセン病は治つているけど、老人病にかかつているから、簡単に出られないと思うね」

「ぼくも毎日老人病の人の世話をしているでしょう。」

あの老人ホームに、おふくろが入っても何も問題がない
と思うんだけどね」

「わたしもあなたの考えに賛成ですね。外国のように
特別扱いをしないで、一般病院でも老人ホームでもあつ
かうのが当然にならないとね。わたしたちも昔から引き
ずつているカラを破らないとね」

「その勇気が必要ですね。でも療養所を出た人達が苦
勞しているお話をきくけど」

「実はね、わたしは目下検査入院中なの。病気が治つ
ているか検査してもらつて、何でもないとなれば、世間
に出たいの。でもね、出ても肝心の兄は死んでしまい、
姉夫婦に頼る訳にはいかないしね。やはり頼る所がなけ
れば困るでしょう」

「そこが問題だと思ふな。社会復帰しようと思つても、
社会復帰者のためのアフターケアというか、ともに職場
や住居をさがし、手をさしのべる所が欲しいですね。結
核患者のアフターケアの施設を国がつくつたように、や
ればもつと復帰する人が出てくると思うけどね」

「国も療養所もそういうことを考えていないんじゃないの。
いの。それよりも生涯療養所でくらし終つていけばい
いと思つているんじゃないの」

「たとえば、あなたが療養所から出ると言つても、ど
こか拠点になる所があつて、体をならして働くようにな
ればいいのでしょうね」

「ほとんどの人は病気をかくして働いているでしょう
ね。病気が再発すれば病院にもどれるとしても、みんな
苦勞しているわね。療養中に車の運転免許や電気技術者
の資格をとつて、車の運転手やホテルなどの電気技術者
やポイラー技術者として働いている人がいますが、成功
した例もありますね。でも多くの人は苦勞しているわ。」

「入所者自治会ではその社会復帰のことを、もう少し
他の福祉団体などから助言を受けて、国と交渉すべきだ
と思ひますね。でも結果的には平均年齢が高すぎるから、
もう無理かもしれない。でもケースバイ・ケースで復帰
しようとする人には対応してあげるべきだと思うけれど
ね——」

「わたしは、それで迷っているの。検査を終えれば、
いつまでも病棟におれず、園内の住宅に入らねばならな
いのよ。お母さん方とも間もなくお別れしなくてはなら
ないの——」

「そうですね。それも良くなつたあかしでしょうから、
何よりも足腰を鍛えなくてはならないでしょう。健康が

第一ですよ」

「あなたが八月にくるときには、移っていますわ。でもお母さんの部屋に行つて、あなたを迎えさせていただきますわ。おみやげが目当てですよ」

「それは承知していますよ。ところで、これから町の中の一部でもご案内しましょう」

と、二人はホテルを出る。文太郎は恵子をまず運河沿いに案内した。

小樽の観光の御三家と言えは何でしょうか。運河に沿つて発動機船がゆつくりと出入りしていて、その上空を白いカモメが群れをなして鳴きながら飛んでいる。運河沿いに見えてきたのは、硝子の店である。北一硝子は明治の頃よりの店だ。元は鍊の初網の位置を確認するために浮玉として登場した。やがて硝子の様々な製品が生まれていった。何代も続く浅原硝子店が有名である。

ついて歩いていくと、オルゴール堂にぶつかる。欧州のスイスで誕生したというオルゴールは、ホテルやレストランで、やがて駅の待合室で、病院での患者の心を癒すなどのために幅広く使用されてきた。色々な種類もあつて心を優しくしてくれる。

そして、三番目が小樽の寿司である。寿司職人のさつ

ぱりした気質が、小樽の寿司店の人気を高めている。魚への感謝から始まつた寿司通も有名になつた。

文太郎はひなびた寿司屋の「のれん」をくぐつた。

「いらつしゃい！」という、かん高い威勢のいい声が奥の方から響いてきた。すでに七、八人の客がカウンターに座つていた。文太郎はカウンターの端の方に彼女と座つた。まぐる、いか、たこ、いくら、うに、あわび、しめさば等々とたいらげていく。夕飯が近づいた時間でもあつたので、次々と海の幸がお腹の中に入つていった。

そこで、文太郎は小樽の歴史は、鍊から始まるという話を恵子に語つた。江戸時代には鍊は本州各地で注目され、北前船によつて北陸から中国、関西、東海地方へと取引が広がつた。鍊や鍊かすによつて、巨額の富をつくる商人が生まれた。

小樽には、その商人の出身地をあらわした俗諺（ことわざ）がある。「地ならし近江」「種まき松前」「肥料の加賀」「刈取越後」と、幕末から昭和初期にかけて、小樽を商業拠点として財を成した商人群像を言い表している。近江商人が地ならしをし、松前商人が種をまき、加賀や越後、能登の商人が肥料を加え、越後商人がおいしいところを刈り取つた、という筋書きを示したものである。

彼等全国の商人によつて小樽の港町が繁盛し、ひいては北海道がひらけていったというのである。

「でも鯨は、取りすぎてとれなくなつたのでしょうか？」

「水温の変化の関係もあるというけど、最近鯨の子を育てて石狩湾に放して実験してみると、春に鯨がとれるようになってきたので、注目されているの。きっと春鯨の大漁も夢じゃないと思うよ」

「そうなれば、嬉しいね」

「鯨の寿司というのは食べたことがないでしょう？」

と、文太郎が言うと、寿司屋の主人が耳にはさんだので、

「いや、三月から四月にかけては鯨のネタもあるんですよ。鯨はとれ始めたんですよ」

「そりゃ失礼しました。ごぶさたをお許しください」

文太郎は頭をかいて立ち上がった。

寿司屋通りから南に向かって進むと、左側に魚市場があり、その中に、タラバガニを売る店があつた。その店の中年のおじさんに恵子を紹介した。

実はその「カニ屋」の主人の父親がハンセン病で岡山の国立療養所に入所していて、お互いに密かに情報を交流していた。文太郎は恵子に、「毛ガニ」一尾をプレゼントするために寄つたのである。ホテルで食べるように、

ビールにくるんで渡した。

文太郎はカニ屋の父親について、恵子に概略話してお願ひした。父親は小樽の手宮出身だったが、漁師になることを嫌つてトラックの運転手になつた。やがてその仲間の招きで横浜に行き、大阪に移つた。関西で働くうちに病気が発見された。大阪大学で診断されて岡山の国立ハンセン病療養所に入所した。しかし、父親は小樽に帰つてきたいので、青森の療養所に移る手続きをしていくという。だからもしも青森に移つたら、恵子にも会つて欲しいと。息子は当然に青森の父親に会いに行くから、覚えておいて欲しい、ということだつた。

翌日、文太郎は友人から車を借りて、恵子を緑が丘の自宅やオタモイの老人ホームにも案内した。ついでに高台にある小樽商科大学にも案内して、小樽の坂の町並の片隅を案内した。そして、昼過ぎの函館行きの列車に案内して、お別れした。

文太郎は、清水恵子が社会で働きたいということがわかつたが、小樽に呼ぶことをためらつて言い出せなかつた。彼女の意志や健康のことなど、時間をかけて相談しようと思つたのだ。

(つづく)

自治会日誌

○印 自治会

二月中

1日○第7回執行委員会

6日 不自由者棟豆まき (中央センター2階多目的ホール)

8日○第8回執行委員会

13日○青森県社会交流レク (南部トリオザシャーマンによる歌と漫談)

15日 第2回院長協議会・北海道東北支部総会 (仙台市)

” 歌つこ広場

” ○地区連絡係定例集会

20日○保健科ふれあい訪問

22日○第9回執行委員会

27日○真宗大谷派奥羽教区との交流会で石川会長が講演

” ○福西名誉園長来訪

三月中

2日○「松丘保養園の将来構想をすすめる会第5回総会」に執行委員3名出席 (於西部市民セン

ター)

3日○むつ市女性団体連絡協議会「女性のつどい」

で石川会長が講演 (於むつ市中央公民館)

6日○第10回執行委員会

12日○橘眼科医師 挨拶に来訪

13日○保健科ふれあい訪問

14日○保健科運営委員会

15日 歌つこ広場

” ○第11回執行委員会

” ○除雪作業員8名 作業終了の挨拶に来訪

” ○地区連絡係定例集会 (平成25年度自治会予算説明)

21日 高知県慰問

22日○第12回執行委員会

26日○東谷商店との売店契約(平成25年度)

” ○厚労省国立病院課 渡辺政策医療推進官、鈴木

木国立ハンセン病療養所管理室長 来訪

27日○青森県健康福祉部保健衛生課 葛西課長、相馬主幹 挨拶に来訪

28日○新城中学校吹奏楽部演奏会

29日 離任式

” ○第13回執行委員会

” ○3/31付退職、転出職員 挨拶に来訪

四月中

1日○4/1付転任、採用職員、挨拶に来訪

3日○青森市健康福祉部 赤垣部長外4名来園、執

行委員と面談

4日○男 八十六歳逝去 秋田県出身

8日○自治会事務所改修工事終了により移転

10日○青森市長選挙不在者投票日

11日○園幹部と執行委員顔合わせ

12日○歌つこ広場

14日○青森市長選挙投票日

17日○甲田の裾編集局企画運営会議

19日○第14回執行委員会

22日○第4四半期自治会会計業務監査（23日）

” ○第31回園内クリーン運動

26日○平成25年度観桜会

編集後記

◇厳しい寒さを乗り越えて、楽しみに待っていた保養園の桜は、異常気象の影響か、鳥害か、期待外れに終わった。大雪で折れてる枝も見受けられた。保養園と近隣住民を繋ぐ桜並木を維持していくことも、歴史を伝えることになるのではないか。

(編集部)

人事異動 ①

〔退 職〕

介 護 長 栗林 秀子

介 護 長 滝野沢ひとみ

看 護 助 手 石郷 善光

看 護 師 長 長谷川廣子

(以上定年退職)

副 園 長 大野 忠良

介 護 長 佐藤 孝子

看 護 助 手 遠藤 智子

(以上 辞職)

〔転 出〕

薬 劑 科 長 及川 慎一 (岩手病院薬劑科長へ出向)

福 祉 室 長 石川 勇一 (あきた病院専門職へ出向)

臨 床 検 査 技 師 長 紺野 幸輝

(いわき病院臨床検査技師長へ出向)

看 護 師 長 田中 恵美 (岩手病院看護師長へ出向)

副 看 護 師 長 工藤 恵 (青森病院副看護師長へ出向)

看 護 師 高松 哲子 (八戸病院副看護師長へ昇任)

(以上平成25年3月31日付)

人事異動②

〔転入〕

薬剤科長 保田 栄一

(仙台医療センター試験検査主任より昇任)

会計班長 大木 良夫 (いわき病院専門職より転任)

臨床検査技師長 杉本 隆幸

(北海道医療センター副臨床検査技師長より昇任)

栄養班長 瀧澤 豊 (東北新生園栄養班長より配置換え)

看護師長 伊藤 悦子 (八戸病院看護師長より転任)

看護師長 木浪真貴子 (あきた病院看護師長より転任)

副看護師長 竹内 千景 (八戸病院副看護師長より転任)

〔配置換え〕

福祉室長 高山 忠久 (会計班長より)

〔昇任〕

介護長 坂本 春美

介護長 阿保恵美子

介護長 藤田 淳子

(以上平成25年4月1日付)

〔採用〕

《定員内職員》

看護助手 大水有里子 (賃金職員より)

看護助手 葛西美恵子 (賃金職員より 第2センター勤務)

看護助手 齊藤 晴美 (賃金職員より)

看護助手 越後谷真紀 (賃金職員より)

看護助手 鎌田 幸弘 (賃金職員より 病棟勤務)

《賃金職員 期間業務職員》

看護助手 神戸 文子 (パート職員より)

看護助手 大柳こずえ (パート職員より)

看護助手 對馬由紀子 (第1センター勤務)

看護助手 鶴谷 柁人 (第2センター勤務)

《パート職員》

看護助手 石村 敏子 (盲人会勤務)

看護助手 工藤 夕湖 (福祉室勤務)

(以上平成25年4月1日付)

〔採用〕

看護助手 石村 春美 (中央センター2階勤務)

(以上平成25年6月10日付)

園内の出来事

○2月13日 青森県社会交流レク



南部トリオザシャーマンによる唄とマジック

○3月28日 演奏会



新城中学校による吹奏楽演奏

○3月29日



離任式

○4月22日



第31回園内クリーン運動

○4月26日 観桜会



花はなくても、歌に踊りに大盛況！



国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で104年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園 長 川 西 健 登

保有敷地 二二〇、五四八平方米

(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方米

(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方米

(一〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行
2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三内公園(1km)と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館(2km)等があります。

発行所

財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八―〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788)〇一四五・〇一四六

発行人 川 西 健 登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話(017)(775)一四三一番